
二度の「・・・・・・・・・・は?」

蒼衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二度の「・・・・・・・・・・は？」

【Nコード】

N1893T

【作者名】

蒼衣

【あらすじ】

これはpixivに投稿した自分の小説を、修正したものです。

（前書き）

しょうもない話です。

どこへ行ってしまったんだ・・・！

僕は顔を蒼白させ、心の中で叫んでいた。

何故こんなことになってしまったんだ・・・！

ついさっきまで僕の隣にいたはずなのに！隣で語り笑い合っていたはずなのに！

どうして！

彼女は一体どこに行ってしまったんだ！

そもそもの始まりはまず僕が家に帰宅したところからである。僕は部活が終わるとすぐに鞆を持ち、靴箱まで駆け寄った。さすがにここは田舎の高校なので、靴箱が少なくそして空間が狭い。自分の出席番号の靴入れに駆け寄り、無造作に靴を引っ張り出す。一年愛用シューズなのでボロくなって、布がよれよれになっている。靴を履くのに少々手間はかかったが、無事に履くことができた。はやる気持ちを胸に走り出す。家までは徒歩で五分。走ればもっと早くに着くはずだ。そう思い僕はさらに足の動かすスピードを速める。今日は、早く家に着いてやるんだ！

僕の家には彼女が待っている。僕のことを待っていてくれる。そのことを彼女に言ったら、そんなことないんだから！とでも言わんばかりに体を別のところに向けて、顔を隠してしまうけれども。それでも彼女は待っていてくれる。僕の胸はときめいていた。

ああ、早く帰りたい！

会話を交わしたい！

僕は彼女のことを好きだ。どうしようもないくらいに好きで、愛しているといっても過言ではないくらい。彼女の仕草、無表情ながらも可愛らしい顔、僕にしか見せないそっけない中にある温かい素の性格もすべてが好きなんだ。そんな彼女と早く会話が交わしたい。隣で笑い合っていたい。彼女とのひとときがいつも待ち遠しかった。

家に帰る。ただいまー、と適当にドアを開けて言い、鞆を放り投げて二階にある自分の部屋に急ぐ。あらあら、急いじゃって、そんなに好きなのね、と母親はリビングから微笑ましいように言ったが僕はそんなのに構う余裕などなく、僕の部屋にいる彼女に一刻も早く会いたかった。

ガチャッ

勢いよくドアを開く。部屋に入った僕の視線の先にはやはり、彼女がいた。小さく座るようにして、待っていてくれた。それだけでも僕は嬉しい気持ちでいっぱいになる。彼女のところに笑顔で駆け寄る。そしてやっと僕の待ちに待った彼女との幸せな時間が始まった。

それから十分後。

僕は彼女との会話を一時的に止めて、トイレに行っていた。学校で彼女のことを考えるあまり、トイレに行くのを忘れていたのだ。トイレに行つてから、一息つく。さあ彼女を長いこと待たせるわけにはいかない。早く帰らなきゃ。二階に続く階段を駆け上り、自室の扉を開く。

「ただい、ま……」

しかし僕が顔を向けたそこには、何もいなかった。
彼女がどこか消えていた。

先ほどまでいたところにはいなく、姿が消えた。

僕は顔面蒼白になる。そんな・・・！彼女は一体どこに・・・！？

不安の気持ちが溢れだし、必死になって彼女を捜す。まだそんなに遠くにはいないはずだ！懸命に手を動かし、頭も回転させる。部屋中探し回ったが、彼女はどこにもいなかった。くそっ、一体どうしたら・・・！

僕は階段を駆け下り、一階のリビングにいる母親に声をかける。

「なあ母さん、彼女はどこにいったか知らないか！？」

半ば怒鳴る口調。母親はちよつと面食らった顔をしたが、すぐに事情を察し、考えるのを手伝ってくれる。そして母親は手を顔に添えて、こう言った。

「ポチでしょ？ポチならこのリビングにいるかもしれないわ」

*

母親の言葉を信じ、俺は懸命になってゴミ箱の中やダンボールの中を調べた。ゴミ箱をひっくり返して中身を出してみる。しかしそこには僕の望んでいる姿はなかった。そんな！ここにいると思ったのに！僕は絶望の淵に立たされたような気分になる。

やはりトイレという短い時間だったとしても、目を離すべきではなかった！

彼女のそばから離れてはいけなかった！

ゲージから外に出してはならなかった！

僕の所為で彼女が・・・！

悔やんでも悔やみきれない。彼女は狭くて人間が通らないところにも入ってしまう。そんなことになってしまったら探すのが困難になる。ポチを見つけづらくなる。早く見つけ出さないと！

ポチがたとえ人間じゃなくたって、僕の愛は変わらない。好きなんだ。一緒にいたいんだ。僕が手を差し出すと、ひょいと手をそこに置く。僕が喋りかけると、彼女は口を開いて鳴く。動物だったとしても、意思疎通をすることはできるんだ！大事な大事な僕の女の子なんだ！ポチを侮辱するなんて、許さない！

部屋の隅々を回り、僕は見落としているところはないかと歩きながら確認をする。そして台所の端のところまでやって来たとき。

「あ……………」

僕はそこで、愛しの彼女の姿を見つけることができた。彼女は端の方に、小さく丸まるようにして座っていた。そのいつもと変わらぬ姿を見て、僕の口からは安堵の息が洩れる。よかった、無事だったんだ。僕の緊張の糸が途切れ、その場に座り込む。

よかった。

ほんとうによかった。

僕はそこに座って僕を円らな瞳で見つめている彼女に手を伸ばした。彼女は僕をじっと見る。そして数秒後。それに彼女は応えてくれた。

僕の大切な大切な緑色をした小さいカエルのポチは、僕の手のひらにちょこんと乗った。

（後書き）

評価、感想が貰えたらとてもないほどに嬉しいです。
飛び上がります↑

もちろん辛口コメント、評価も大丈夫です。
むしろお願いしますm（| |）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1893t/>

二度の「・・・・・・・・・・は？」

2011年5月11日18時10分発行